

こどももらごいつしよに

お正月を迎える

倉橋 惣 三

一月といつては、あつけないし、新年といつても、かどばる。ハッピー・ニューイヤーは、朗かだが、とてもほんとうのプロナウンシェーションもアクセントもむづかしい。昔々からというよりも、生れた時から聞きなれ、こどもの時から言いなれた『お正月おめでとう』が、この月の感じを、一番びつたり出す。殊に幼いこどもが、あの可愛い唇で、そう言つて呉れるとき、自分のこどものとき

の明るさと、嬉しさと、理屈もない楽しさとに、わけもなくお正月になれる。一つ年令を重ねたからというのも、重

くるしい。將來を慶賀するというのもふんべつがはいる。相變りませすに至つては、ひつっこい。たゞ今日を、今を、前を忘れ、後を思ふぬ幸福感で充ちこぼれてこそ、それだけでこそ、こどもといつしよにお正月を迎えているのだ。そのたわいもない氣もちでこそ、こどもらこいつしよに、たこがあげられる。はねがつけからつ風の中も甞び歩ける。少し位、何が何んであつても、叱らないし、「教育」もしない。たゞもう、お正月おめでとうと言つてやる。子供のためのお正月

月ではない。こどものお正月だから、おめでどうとでいつてやるよりはかに言葉もない。ほかに言いようがないというよりも、自分のこどものときの言葉そのまゝが、年經て古びた唇からも、生き生きと出て來るのだ。

あんまり、こどもに歸つていてもいけないから三ヶ日に限つたのか、松の内五日に切りつけたのか。いゝではないか十日でも十五日でも、一月でも一年でも、こんな心で、こどもといつしよに日が迎えられたら、その一日々々を、こどものための日以上、こどもの日にしてやることができよう。それこそ、こどもにも、われらにも、どんなに幸福だろう。年がら年ぢゆう、そうもいかないから、一年に一度づゝお正月があるのだとおつしやるのですか。なるほど、そういう譯もありましようが、毎日お正月だつて、こどもはいやとは思いませんまい。たゞ、わたしたちが、その毎日をこどもの日として、始終、いつしよにおめでどうといえるかどうかです。

こどもにとつて、お正月は歳を一つ加

えてくれることに相違ない。わが子の成長を願う親たちとしては、それが喜びであることにも相違ない。が、實のところをいえば、こどもはそんなことを考へてはいない。おとなに近くなることが嬉しいのではなくて、此の數日、すつかりこどもになれることが嬉しいのであるまいか。もつと説明的にいえば、家庭からも社會からも、こどもをこどもらしく楽しませて貰えるのが嬉しいのであるまいか。あのこどもらが喜んで歌うお正月の歌でも「もういくつねると」と待つてゐるのは、たこをあげ、追ひ羽子つくお正月の日であつて、一つ大きくなることでもなし、まして、だからしつかりしようなんていうことでもない。それでは、お正月の祝すべき所でもないではないかと言う人があつたら、それは、こどものお正月を解しない人である。

おとなの正月にしても、必ずしも加齢の喜びでもあるまい。年々歳々の加齢は、悲しくもないが、何んでもないことかも知れない。殊に、こどもらといつしよに迎えるお正月は、加齢よりも減齡

(?)の日である。若がえりどころか、こどもがえりである。だからこそ、いゝ歳をして、たこもあげる、追羽子もつく。齡々がさういふ気分になるばかりでなく、互にその気分になりあい、社會的にも承認する。

こどもがお正月を喜ぶのは、こどもらしく楽しませて貰えるからだと前にいつたが、よく考へてみると、それではまだ説明が足りない。もつと深くは、おとなたちが、自分らと同じこどもになつてくれるからである。おとなは、こどもがおとなでないことに屢々不満であつたりするのであるが、こどもこそ、おとながこどもでないことに、どの位、屢々不満を感じさせられてゐることである。それが、お正月には、おとなが自分たちと同じになつてくれるのである。こどもらが、快心の至りとするのも察せられるというものであるまいか。

お正月には、何にでも「初め」という字をつけることになつてゐる。初日の出、若し雨が降れば初の雨。初笑い、若し泣けば初泣き。その意味は、その年で

の初めということでもあらうが、更には、目の出そのものゝ新らしさ、すなわち新らしく、ういゝしい日の出、笑ひそのことの新らしさ、すなわち新らしく、ういゝしい笑ひという感じが籠つてゐるのである。その時、人間も亦、新らしく生れ、ういゝしくならずにいぬ。その意味で、「新年おめでとう」も、たゞ、新らしい年ですなわといつただけの、外面的の挨拶ではなくて、あなたも、もう一度新らしくおなりですなわといふ、内面的の祝意でなければなるまい。人間は新らしくなることほど目出度いこととはなく、ういゝしいほど幸福なことではない。達人は常に新らしい心をもち、ういゝしさを失わないといわれるが、われらの風俗は、古り易く、ひからびがちであるを免れない。せめて、三百六十五日目に一度づゝ、新らしくういゝしく、すなわち、こどもに歸るのである。